奈良県の戦争遺跡

―忘れてはいけない歴史―

帝塚山大学同窓会

第 4 回「学生チャレンジ制度」

成果物

帝塚山大学法学部　国際法・平和学ゼミ（2019 年度）

目次

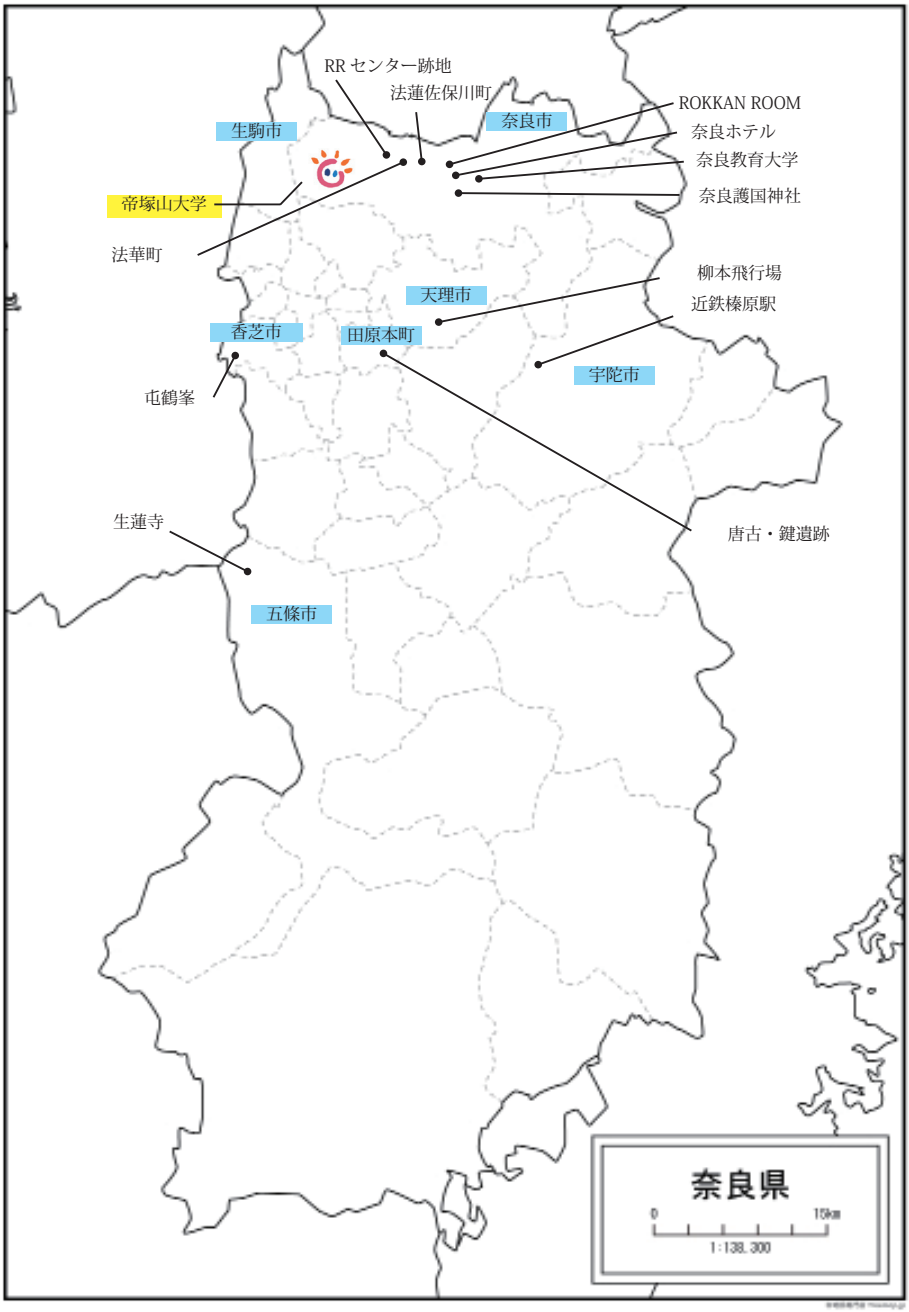
地図

なぜ今、戦争遺跡の調査を行うのか…… 3
第１章　戦争遺跡に関する現状と課題 …… 4
第２章　帝塚山学園と太平洋戦争 …… 6
第３章　奈良ホテル …… 9
第４章　奈良護国神社 …… １３
第５章　天理市の柳本飛行場
—日本軍は最後まで戦おうとした—…… １５
第６章　榛原駅東高架下の機銃掃射痕 …… ２０
第７章　奈良教育大学—奈良聯隊の跡地— …… ２２
第８章　五條の空襲　生蓮寺を訪ねて—ゼミ生訪問記— …… ２６
第９章　香芝市の屯鶴峯地下壕 …… ２９
第 10 章　RR センター跡—米軍の娯楽慰安施設跡— …… ３４
第 11 章　法蓮佐保川町周辺と法華町
—奈良で最初に空襲があった場所—…… ３７
第 12 章　ROKKAN　ROOM—民家の防空壕を改装したカフェ—
…… ３８
特集　西田敦氏による特別講演「奈良の空襲」レポート…… ４０
参考文献…… ４９

※表紙写真は榛原駅東高架下の機銃掃射痕

戦争遺跡調査 MAP

※ 2019 年度調査分のみ



なぜ今、戦争遺跡の調査を行うのか

元号が平成から令和に変わり、新たな時代が始まりました。私たち日本人は、昭和という時代において太平洋戦争を経験しましたが、平成の時代は幸運なことに戦争を経験することがありませんでした。そして令和になってから、少なくとも日本においては戦争は行われていません。

戦争がないことは平和でとても有難いことですが、時の流れとともに戦争体験者が減少し、戦争について語られる機会が少なくなってきています。このような時代だからこそ自分たちの足を運び、目、耳、そして肌で感じて次世代の社会を担っていく私たちから新たな発信をしたい。戦争といえば広島と長崎への原子爆弾の投下がまず思い出されますが、それ以外の各都道府県でも戦争被害があったという事実とともに、帝塚山大学が位置する奈良県においても確かに戦争があったことを忘れてはいけません。

私たちゼミ生は、戦時のことについてまず「知ること」から始めることが大切だと考え、帝塚山大学同窓会　第4回「学生チャレンジ制度」に応募をしました。プロジェクト名は「小冊子『奈良の戦争―忘れてはいけない歴史―』（仮題）刊行プロジェクト」です。書類およびプレゼンテーションによる審査を経た後に採択されました。プロジェクトの内容は、「平和の尊さと戦争の悲惨さを後世に伝える」という目的で奈良県内の戦争遺跡調査を行うというものです。

2019年の夏休み以降、奈良ホテルの防空壕や天理市の柳本飛行場跡地、そして奈良教育大学（奈良聯隊敷地跡）に行きました。また、五條市の生蓮寺に行き、空襲の話や平和の鐘について聞き取り調査を行いました。詳細は本冊子の内容をご覧ください。収録したのは戦争遺跡だけではなく、戦争に関連する場所や出来事を含みますが、1年間という限られた期間ゆえ決して網羅されているわけではないことをお断りしておきます。

戦争について語ることで戦争の惨禍が繰り返されない明確な意志が生まれることを期待しています。私たちゼミ生、そしてアドバイザーとして本プロジェクトに参加して頂いたゼミの指導教員である末吉洋文教授を含めて「戦争を知らない世代」による取り組みでしたが、少しでも本プロジェクトの目的を達成することができればと思います。

2020年3月
帝塚山大学法学部
国際法・平和学ゼミ生一同

第 1 章　戦争遺跡に関する現状と課題

戦争遺跡とは、主に明治時代から太平洋戦争終結までの間の戦争にまつわる遺構や遺物などを指す。定義は定まっておらず、地域の歴史に応じて幕末まで含めることもある。通常、場所や動かすことの難しい施設の跡をさすが、その場所に関係のある兵器や生活道具などが含まれることもある。

戦争遺跡保存全国ネットワークによると、文化財に指定登録された全国の戦争遺跡は 295 件（2019 年 7 月末現在）だが、実際には全国に 2 万以上あるとされ、地上戦があった沖縄は特に多い。

史跡や文化財に指定・登録された主な戦争遺跡としては、札幌市の旧西岡水源地取水塔、東京都の旧近衛師団司令部庁舎、山梨県南アルプス市のロタコ跡 3 号掩体壕、京都府舞鶴市の舞鶴旧鎮守府倉庫施設、広島市の原爆ドーム（旧・広島県産業奨励館 1995 年（平成 7）指定）、長崎県佐世保市の旧佐世保無線電信所、長崎市の長崎原爆遺跡、沖縄県南風原町の沖縄陸軍病院壕がある。また、本プロジェクトは太平洋戦争を念頭に置いて調査が行われたが、西南戦争の激戦地（熊本市など）を集合した西南戦争遺跡（2013 年（平成 25）指定）も戦争遺跡のひとつとして数えられている。

戦争遺跡に関しては、指定や保存に関するガイドラインを国が示していないため、歴史や学術上で貴重な戦争遺跡であるにもかかわらず、放置され、あるいは土地開発のため失われかねない状況にあるものも多い。また、数が多く広域にわたるため全容把握に時間がかかること、「負の遺産」でもある戦争遺跡への評価が分かれていること、保存後の管理などに多くの費用が必要ということもあり（地方自治体の財政負担が増える）、時代の推移と共に戦争遺跡が失われていく現状がある。

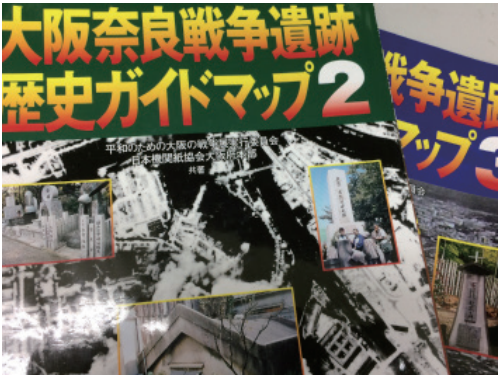
1996 年から近代遺跡の全国調査に着手した文化庁は、各都道府県に情報提供を求めた際は、①国の近代史で欠くことができない、②学術研究上重要な意義がある、③地域における近代史の特徴をよく示す、との基準を伝えたのみであった。「軍事」の近代遺跡について、旧日本軍施設や軍需工場、戦災地などと具体例は示していない。

毎日新聞は 2019 年 11、12 月、全都道府県にアンケートを実施し、す

べての都道府県から回答を得た。そのうち戦争遺跡の全数調査をしたと答えたのは、埼玉、滋賀、奈良、高知、福岡、沖縄――の 6 県であった。戦争遺跡の調査や保存を巡る課題を複数回答で聞いたところ、回答した 46 都道府県のうち 24 府県が「戦争遺跡の定義付けが難しい」を選択。「指針を示してほしい」と国にリーダーシップを求める意見もあった。

奈良県は戦争遺跡に関する全数調査を行っている数少ない県であるが、本冊子に掲載されている戦争遺跡も、積極的な保存に向けた動きが国や自治体のみならず、私たち 1 人ひとりが関心を持ち、まずは戦争遺跡の存在を「知ること」から始めなければならないであろう。

戦争遺跡保存全国ネットワーク



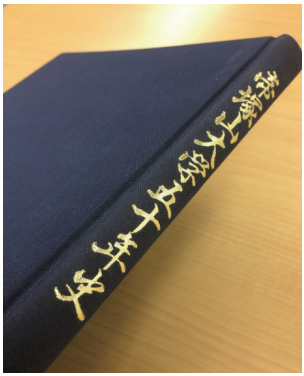
戦跡調査のバイブルともいえる資料

第２章　帝塚山学園と太平洋戦争

帝塚山学園は、昭和 16 年 2 月 28 日に設立され、その 4 月、奈良市学園南 (※当時は奈良県生駒郡伏見村) に旧制帝塚山中学校を設置し、第一歩を歩み始めた。構想では、7 年制の旧制高等学校設置であったが、制度上の制約から中学校の開設となった。入学生は僅か 171 人であった。

戦後の学制改革により、昭和 22 年に男女共学の新制中学校、翌 23 年に帝塚山高等学校を設置した。

『帝塚山大学五十年史』には、戦時中に関する記述がある。



戦時下の学園

昭和 16 年 4 月 10 日、あやめ池遊園地内の仮校舎で、帝塚山中学校の入学式が行われた。戦時非常時下であり、新入生 171 人はカーキの制服に戦闘帽、巻きゲートル姿だった。開校時の役員は、理事長＝山本藤助、理事＝庄野貞一（学園長）・栗本勇之助・岸本吉左衛門・岡谷惣助・森磯吉（校長）である。

同年 8 月 1 日、校舎建設の地鎮祭が行われた。12 月に木造瓦葺き平屋建ての本館、特別教室棟（3 教室）、2 階建ての普通教室棟（10 教室）などが完成。翌年には物象（理科）教室棟などができた。仮校舎

から新校舎への移転は 17 年 1 月 8 日に行われた。

18 年 9 月 16 日、”帝”の字に赤松の松かさと 2 本の松葉の校章をあしらった「学園旗」が制定された（庄野学園長寄贈）。赤松の持つ力強さと風雪に耐える永遠性、我が国古来の伝統的自然美を表し、「正しく、清く、たくましく、美（うるわ）しくの理想を象徴している。

一方、16 年 12 月 8 日に太平洋戦争が勃発、戦局は日増しに厳しさを増した。生活物資は配給制となり、学園でも 1 ～ 3 期生たちが授業の合間を縫って、農作業や炭焼き、道路工事などの勤労奉仕に勤しんだ。

19 年 8 月 23 日、「学徒勤労令」が公布された。それに先立つ 7 月、帝塚山中学校の生徒 313 人が三菱重工名古屋発動機製作所に出動した。10 月には大阪から帝塚山学院小学部の児童 347 人が教職員らとともに、学園に集団疎開してきた。20 年 3 月 29 日、1 期生の 4 年生が 1 年繰り上げで卒業となり、式が執り行われた。しかし、卒業しても工場での勤労は続いた。

20 年 8 月 15 日、日本はポツダム宣言を受諾、第二次世界大戦が終わった。敗戦直後の日本は混乱を極め、食料・燃料の不足が甚だしかった。学園でも勉強どころではなく、実習農場を設け、生徒たちは芋や米づくりに精を出した。（24-25 頁）

政府は 19 年 3 月、「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」を閣議決定。中学生以上は、常時勤労に就くことが決められた。さらに 8 月 23 日、「学徒勤労令」の公布。それに先立つ 7 月 13 日、帝塚山中学校の生徒 313 人が三菱重工名古屋発動機製作所に出勤。会社の寮に起居しながら、三部交代で深夜作業にも従事した（帝塚山学園創立 70 周年記念誌編集委員会（編）『帝塚山学園七十年史』（2012 年））。

三菱航空機製作所の工場における B29 襲来の様子は梅田宇之助氏による「戦中記」において描写されている（帝塚山学園創立四十周年記念誌編集委員会（編）『星晨　創立四十周年記念誌』（1981 年）、146-149 頁。）。

三菱重工名古屋発動機製作所へは同じ奈良県から畝傍中学と奈良商業の勤労学徒も働いた。

奈良市史編集審議会編『奈良市史　通史四』（奈良市、1995 年）によれば、「帝塚山中学校・・・十六年に開学したばかりだが、十九年から三・四年生が三菱重工名古屋発動機製作所へ。工場全壊後京都三菱桂工場や山科の鐘紡工場に移った。一･二年生は柳本飛行場へ。」との記述がある（572 頁）。この工場全壊とは、名古屋発動機製作所が爆撃を受けたためで、その様子は写真「名古屋市街の惨状Ⅲ」（1946 年（昭和 21 年）6 月 5 日）として記録が残されている（空白の昭和史刊行委員会編『ドキュメント写真　空白の昭和史　第 4 巻　空爆による被害状況　関東・中京地区』（エムティ出版、1999 年）、26-28 頁）。

帝塚山学園創立 70 周年記念誌編集委員会（編）『帝塚山学園七十年史』（2012 年）によれば、1941 年（昭和 16 年）4 月 10 日にあやめ池遊園地内の仮校舎で帝塚山中学校の入学式が行われたが、「戦時非常時下であり、新入生 171 人はカーキ色の制服に戦闘帽、巻ゲートル姿だった」とある。

1942 年（昭和 17 年）4 月、東京・名古屋・神戸などが米軍機により初めて空襲を受けるなど戦局は日増しに厳しさを増した。食糧、衣料などの生活物資も配給制。学園でも 1 ～ 3 期生たちが、授業の合間を縫って、草刈りや稲刈りなど農作業の手伝い・・・。森礒吉校長を先頭に炭焼き、道路工事などの勤労奉仕で、生徒たちは真っ黒になっていったという。

名古屋被爆の後の 1945 年 1 月 4 日、引率教員が空襲警報下の病院で病死したほか、2 期生の 1 人が自宅から通勤途中に被弾、死亡した。1944 年 10 月には大阪から帝塚山学院小学部の児童 347 人が教職員らと共に、学園に集団疎開してきた。秋には軍の命令で、「学園前駅」も休止のやむなきに至った。1945 年 8 月 15 日、日本はポツダム宣言を受諾。第二次世界大戦は終わった。桂の工場で、玉音放送を聞いた 2 期生たちは、久しぶりに学校に帰った呆然とした。校舎の一部が久保田鉄工所の疎開工場に変容。教室の窓枠は取り外され、モーターを取り付けた旋盤工作機械が並んでおり、勉強どころではなかった。

以上が帝塚山学園の関連資料その他が伝える当時の様子である。

第３章　奈良ホテル

所在地：〒 630-8301 奈良県奈良市高畑町 1096

奈良ホテルは、日本が日露戦争に勝利したことにより外国人向けにできたホテルである。明治 42 年に開業し現在まで営業が続く伝統や歴史を感じることのできるホテルである。完成した当初は、独、英の皇族や貴族などの多くの実業家達が訪れていた。

奈良ホテルの HP には「関西の迎賓館と云われ、国賓・皇族の宿泊する迎賓館に準ずる施設となっていました。 本館の建築には、東京駅や日本銀行本店などを手掛けた建築家　辰野金吾氏が担当し、雅な大和の街並みとの親和性も高く、瓦葺き建築で、内装は桃山風の豪奢・華麗な意匠で、重厚感溢れ､和洋折衷の美しい佇まいは今も変わらず魅力的です。 建築後は、時代にも翻弄された歴史があり、ただどの時代の人たちも変わらず、このホテルを残そうという思いは、今に引き継がれております。」と記されてある 。

奈良ホテルの歴史は日露戦争後に始まる。戦争に勝った日本には来遊する外国人が急増し、そのため政府は全国の主なホテル・旅館経営者を集め、必要な保護特典を与える旨の発表をした。これを受けて、関東では大倉喜八郎（帝国ホテル創業者）、関西では西村仁兵衛（都ホテル創業者）が活動を起こし、奈良ホテルは明治 42 年 10 月 17 日に開業した。

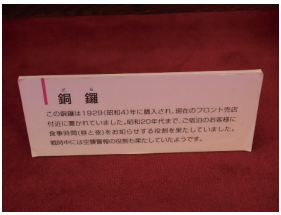
鉄道院･鉄道省が直営していた時代（大正 2 年～昭和 20 年）にあっては、奈良ホテルは鉄道院の手厚い庇護の下、俗世間から離れた最も華やかな時

代を過ごす。国営で利潤に追われることがなく、宿泊客は「高等官以上又は資本金一定額以上の会社の重役」の原則が厳格に守られ、空室が沢山あっても満室とお断りすることがよくあったという 。

昭和期に入り、昭和 20 年代ごろからは、満州事変や第二次世界大戦などがあり、次第に軍事色を帯び、満州国皇帝、ドイツナチス党幹部、イタリアファシスト党幹部の来館が相次ぐようになった。

戦時中でも奈良ホテルは、国鉄が作ったホテルであるいうこともあり、多くの軍人幹部が来館し、最優先で食料配給を受けることができ牛肉などを使用した献立を作ることができていた。しかし、終戦が近づくにつれ、牛肉などが手に入らなくなり、イルカ肉などで代用されるようになった 。

銅鑼（ドラ）は、お客さんに食事の時間を伝えるために使用されていたが、戦時中は、空襲警報があると銅鑼を鳴らして客に知らせ、お客様を空襲から安全に守れるよう、ホテルの外にある防空壕に逃げこむように誘導していた（2019 年 9 月の現地調査の際には耐震工事中であったため、改めて 2020 年 2 月に銅鑼の写真を撮影）。現在は、ホテル入り口正面の赤じゅうたんの大階段を上ったところの踊り場に置かれてある。



防空壕とは、一弾による被害を局限するために作られたもので、壕の大きさは約 20 人収容することができる、なるべく小単位のものが分散的に配置されていた。中は、座るか腰掛けていられる程度の深さしかなく、約 1.5m 程の穴を掘り、土質が軟弱の場合は杭と板で土留めをするなどをして作られたものもあった。

大東亜共栄圏思想に共鳴していた、ラウレル・フィリピン大統領が日本に亡命した時、亡命先に奈良ホテルが選ばれた。滞在時には、従業員には厳しい緘口令がしかれた。一行は、二階大部分を占領し、ホテル回りも憲兵隊が守っていた。空襲警報が鳴った時は、一般客とは別で大統領一行の専用の防空壕に避難されていた。

奈良ホテルの防空壕はそのままで残っているが、その存在に気付く人も少なく、現在は入れないようになっている。

奈良ホテルに直接的な被害はなく、終戦を迎えたが、奈良ホテルは、その後米軍にホテルを接収され、米軍の中尉から少佐クラスを長に 5，6 人程度の日本人従業員が、米軍の労務員として米軍の管理下に置かれていた。接収当初は、警戒が強くホテル前に数門の砲を置き、食堂入り口前に機関銃を据えて、米兵達は食事中もショットガンを備えるなどをして、戦争が終わってからも緊迫感のある状態が続いていたが、時が経つにつれ徐々に戦争色が薄れていった。接収解除後の営業状態は極めて厳しいものであり、外国人客は激減、日本人客もまだ生活水準が低く、ホテルは閑古鳥が鳴いている状態であった。

1951 年（昭和 26 年）9 月に、日本は戦争状態終結のための対日講和条約および日米安全保障条約が締結され、両条約の批准書は、奈良県に来

県中であった昭和天皇によって 10 月 19 日に奈良ホテルで認証された（奈良市の知事公舎と記す資料もある）。そのすぐ翌年の 6 月 30 日に奈良ホテルは米軍によって接収解除された。

その後は、株式会社都ホテルに引き継がれ今もなお 100 年も越えるホテルとしてその伝統を引き継ぎ今なお営業が行われている。

＜奈良ホテル　戦争関連年表＞

1909（明治 42）年 10 月	奈良ホテル竣工、営業開始
1935（昭和 10）年	満州国皇帝溥儀を迎える
1944（昭和 19）年	金属類非常回収のため、ホテル金属類供出される。
1945（昭和 20）年 6 月	奈良ホテルが日本の傀儡、大東亜共栄圏指導共鳴者のフィリピン大統領ラウレル一家の亡命宿舎となる。
1945（昭和 20）年 11 月	米軍に接収される
1945（昭和 20）年 12 月	米軍のレクリエーション施設となり、財団法人日本交通公社に運営が委託される。
1951（昭和 26）年 10 月	対日講和条約および日米安全保障条約の批准書が奈良県に来県中であった昭和天皇によって奈良ホテルで認証される
1952（昭和 27）年 6 月	米軍による接収解除

第４章　奈良護国神社

所在地：〒 630-8424 奈良県奈良市古市町 1984

神社の本殿の手前には戦歿者慰霊塔があり、その碑文には以下のように書かれてある。

「明治建軍以来日本民族の発展と国家の隆盛を祈念しつつ日夜軍務に精進し生を捨て義をとる崇高なる犠牲的精神また旺盛なる責任観念と不撓不屈の精神力を陶冶し日清日露の両戦役をはじめ幾多の危機に国家のため挺身してその難に当たることに第二次世界大戦においては世界列強の包囲に抗し南方諸民族を解放独立せしめんと炎熱身を灼く大陸の山野に酷寒肌をも凍らす北辺に怒涛うず巻く南海に各地で奮戦日本精神に生き悠久の大義に殉ぜんと後に続くを信じつつ御国のため雄々しく散華せらるこの至誠至純の精神こそ何よりも尊いものであり今日この日本の平和と繁栄をもたらしたのはその血潮の結晶のたまものであり千載青史に銘記すべきである

ここに建軍以来の奈良県出身陸海軍戦歿者二万九千百十柱の御霊を顕彰するとともにその遺勲を末永く後世に伝えんがため県内外有志一万三千余名のご芳志と８百余名の建設委員の尽力によりこの慰霊塔を建立す願わくは在天の諸英霊安らかにこの高円の丘に鎮まり給いて永久に世界平和と国家の隆盛にご加護あらんことを

昭和五十二年十月吉日

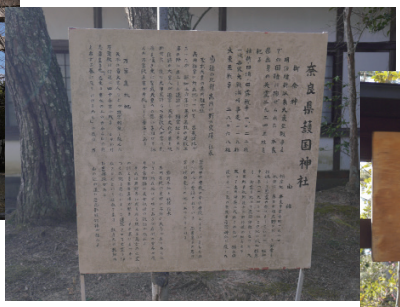
奈良県出身陸海軍戦歿者合同慰霊塔建設委員会」

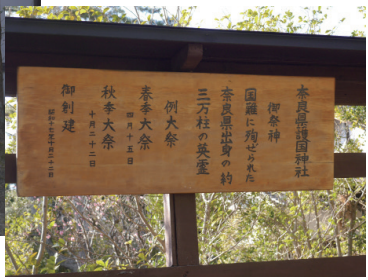
また、慰霊塔の土台部分には太平洋の地図があり、奈良県出身の多くの方々がアジアの各所において戦争で命を落とされたことがわかる。

神社の入り口に立てかけてある説明板には「御祭神　明治維新以来大東亜戦争までの国難に殉ぜられた奈良県出身の英霊 29243 柱を祀る」とあり、維新・日清・日露戦争　1022 柱、一次世界大戦・満州事変　119 柱、大東亜戦争　28068 柱と書かれてある。

由緒としては「鎮座地　奈良市古市町 1984　以前は春日の飛火野において御霊を招魂して慰霊の祭をしていたが昭和 17 年（1942）にこの地に竣工鎮座し御霊を祀って護国神社となった。大東亜戦争敗戦後に一時付近の地名より取って高円神社に改称されたが独立回復によって元の奈良県護国神社に復した」とある。2 年 2 か月にわたる県民の勤労奉仕による。奈良県でも知事・軍関係者等が建設奉賛会を結成したという。

そもそも護国神社は、招魂社という名前であった。昭和 14 年 3 月、全国の招魂社は護国神社に改称されたが、府県社に相当する招魂社のなかった奈良県では、同年 6 月に奈良県護国神社建設奉賛会（会長・奈良県知事）が結成され、添上郡東市村（元奈良市古市町）に建設地が決定した。14 年 7 月から用地買収、15 年 4 月から整地作業が始まったが、その多くは県民の勤労奉仕であり、延べ 15 万人がこれに参加した。16 年 12 月から社殿建築を開始、昭和 17 年 10 月 22 日、英霊 3000 柱を奉祭する鎮座式が執行された。ツルハシ・スコップ・モッコ・天秤棒を使った、人力での懸命な作業だったという（『奈良市の昭和』29 頁）。





第５章　天理市の柳本飛行場

―日本軍は最後まで戦おうとした―

柳本飛行場の正式名称は「大和海軍航空隊大和基地」という。太平洋戦争時の 1942 年の夏から測量が始められ、1943 年秋ごろから建設が始まり、1944 年に現在のＪＲ桜井線長柄駅から柳本駅の西方に開設された。

飛行場の建設にあたっては、地元の人々をはじめ、県内から集められた軍属・成人男女の勤労奉仕隊・中学生を主とした学生・予科練習生、そして、その中には 3000 人に及ぶ朝鮮の人々が強制連行されたといわれている。

当時、強制連行された朝鮮人によると「夜、突然、連行され、貨車、船、トラックで運ばれた後、貨車列車に乗りついたところが柳本だった。昼間は飛行場の建設に、夜はトンネルを掘った。ごはんは一サジぐらいで汁をかけたらもう無い。腹が減っているからイナゴとか食べられるものは生で食べた。」と証言している。飛行場建設中に３人の朝鮮人徴用工の犠牲者を出した。（「奈良県下の朝鮮人 強制連行」http://www3.kcn.ne.jp/~eatyhiro/new_page_25.htm）

1942 年６月５日のミッドウェー海戦の敗戦、1943 年２月１日のガダルカナル島からの撤退など戦局が悪化し、このような中で、300 ヘクタールもの広大な農地に大和海軍航空隊基地の建設が始められた。本土決戦の重要基地として終戦時には 100 機以上の軍用機が残されていた。大本営の移転候補になったとの記録もある。『奈良県の百年』によれば、田畑が安く買いあげられ、村の墓地までがつぶされた。掘り返された人骨を焼く異臭が三日もただよったという。この年７月、柳本飛行場は何回も艦載機に攻撃され、７月 28 日には民家三戸が全焼している。

Q.　柳本飛行場は帝塚山大学東生駒キャンパス何個分の広さ？

・甲子園球場　約 38,500 平方メートル＝ 3.85 ヘクタール

・東生駒キャンパス　約 183,756 平方メートル＝ 18.3756 ヘクタール

・柳本飛行場　300 ヘクタール

計算式　　300 ÷ 18.4 ＝ 16.304…

正解）東生駒キャンパスの約 16 個分の広さ

柳本飛行場に作られた滑走路は、幅 100 m、長さ 1500 mと大規模なものだった。滑走路は二本作られる予定だったが、敗戦で一本だけに留まった。米軍が接収した後、元の農地に戻され、滑走路の両側には滑走路への地下水の侵入を防ぐために暗渠による水路が設けられたが、その暗渠は今も田んぼの中に残されている。さらには二つの防空壕も作られたが、防空壕は堅固な作りであるため撤去できず、今も原型をとどめている。

奈良県退職教職員協議会編『わたしの戦争体験　第 4 集』（奈良県退職教職員協議会、2003 年）に所収されている奥忠昭氏の「軍国少年の頃」によれば、飛行場近くの道路わきには掩体壕（えんたいごう）がいくつも作られ、日の丸のマークも鮮やかな飛行機が何機も駐機していた。そのほとんどが「赤とんぼ」（初等練習機）で、機体は布張り、プロペラは木製だったという。飛ぼうにもガソリンは欠乏しており、代用ガソリンの松根油を作るために、山に入って松の根を掘ったこともある。との記述がある。掩体壕とは、厚いコンクリートで覆った壕内に航空機を格納し、空襲から守るために造られた格納庫のことで、通常はコンクリート製であり、少ない資材で大きな強度が得られるかまぼこ型をしている。

1）　跡地の説明板をめぐる論争

跡地の説明板に関しては、2019 年 7 月 6 日の毎日新聞の記事「海軍飛

行場跡の徴用工説明板撤去 『歴史を残せ』市民が再設置」に詳しい。記事によれば、以前は別の場所に市の説明板があったが、苦情を受けて撤去された経緯がある。

教員ら中心の市民団体「奈良県での朝鮮人強制連行等に関わる資料を発掘する会」の調査などを基に天理市と天理市教育委員会は 1995 年、説明板を飛行場跡に設置した。多くの朝鮮人労働者が「動員や強制連行によって」働いていたことのほか、慰安所が設置され、朝鮮人女性が強制連行されたことについても記載し、「歴史の事実を明らかにし、二度と繰り返してはならないこととして正しく後世に伝える」とした。

ところが、2014 年 2 月以降、撤去を求める電話やメールが市に届いたため、市は当時「さまざまな歴史認識があり国でも議論されている中、市の公式見解と解される掲示は適当でない」との見解に基づき同年 4 月、説明板を撤去した。

私たちがゼミ調査した時は、「旧」説明板の所在地は資料（平和のための大阪の戦争展実行委員会 (著)、日本機関紙協会大阪府本部 (著)『大阪・奈良 戦争遺跡歴史ガイドマップ〈2〉』（日本機関紙出版センター、2003 年）、61 頁）によって確認できたものの、「新」説明板の位置が判らず、最終的には天理市役所に電話をかけて判明した。現在の場所は旧の説明板の位置から直線距離にして北東方面約 700 メートル、白堤神社の近くに設置されている。

＜新しい説明板の位置情報＞

２）唐古・鍵遺跡史跡公園内にある高射砲

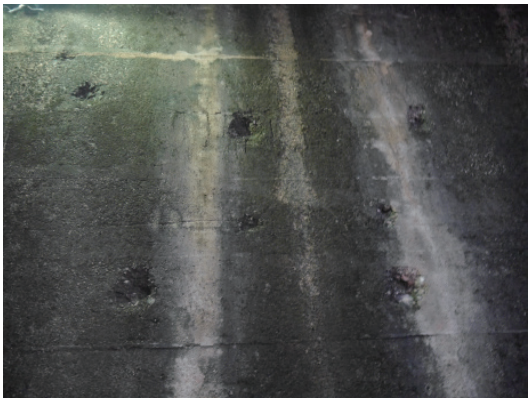
柳本飛行場は天理市に所在するが、西へ約 2㎞進むと国道 24 号線沿いに唐古・鍵遺跡史跡公園がある。奈良盆地の中央に位置するこの公園は、今から約2000年前の弥生時代に存在した日本最大級の集落の遺跡である。

ここには柳本飛行場に関連する戦争遺跡が存在している。公園内に足を踏み入れてまず目に入るのは、唐古池（江戸時代に造られた農業用のため池）の傍にある復元楼閣であるが、これは「唐古・鍵遺跡のシンボルで、うずまきの屋根飾りを持つ個性的な建物」（唐古・鍵遺跡史跡公園 HP）であり、「遺跡から発掘された土器に描かれていた絵画を元に復元」されたものだという。

唐古池の傍にある高角砲跡が戦争遺跡である。「太平洋戦争の遺跡がここにもあった」という表示のもと、「この八角形のコンクリート構造物は、太平洋戦争末期につくられた高角砲の台座です。ここから東約２ｋｍにつくられた海軍柳本飛行場を守るために、その周辺に数基の砲台が置かれていました。～小池堤防上にも多数の高角砲が置かれていたといいますが、唐古池東側堤防とここの２基の台座が残っています。」との説明文がある。

第 6 章　榛原駅東高架下

1945 年に 7 月 24 日午前 9 時過ぎに近鉄榛原駅に向かう 3 両編成が上部の写真の高架の上で電車が止まったところで東側から襲来してきた 2 機の米軍戦闘機グラマンが急降下し、電車にめがけて機銃掃射を行った。奈良県内で 15 件あった空襲の中で通勤・通学の時間だったため最大の死者件数を出す「榛原空襲」と呼ばれる惨事が起きた。この榛原空襲で死者 11 名　負傷者 27 名といわれている。



電車の中ではいたるところでうめき声があがり、車内は血の海となっていて何人もの人が折り重なるように死んでいったそうだ。ほかの多く取り残された乗客は窓から 6 メートルの下の地面に重なるように飛び降り、その地面は血で真っ赤に染まっていたと載っていた。

昭和 50 年 7 月 24 日に供養塔が建立された。所在は近鉄電車大阪線榛原駅より東へ約 500 メートルの位置のガード下である（奈良県宇陀市榛原萩原 2552）。

供養塔には死者 11 人、負傷者 27 人と記されているが、多くの方の証言では「死者 40 数名、負傷者はその倍」に達したともいわれている。そのあとに当時近くに住む住民が 1975 年に高架の弾痕側に供養塔が建てられた。個人で建てたみたいなので名前などは表記がなかった。

実際に行ってみて当時を物語るように複数の弾痕跡が残っていた。写真は一部だが、実際にはもっと広く跡が残っていた。

2014 年の 3 月には高架下にその時の案内板が設置された。前市遺族会会長・田中實さん地元住民らが「榛原駅に空襲があった 69 年前の戦争が忘れられないように後世に残してほしい」と市に要望があり、設置されたものである。

第７章　奈良教育大学―奈良聯隊の跡地

所在地：〒 630-8528 奈良県奈良市高畑町

現在、国立大学法人奈良教育大学は奈良聯隊の跡地に所在している。遡ること 1908 年に歩兵 53 連隊が置かれたが、1925 年に廃止され、京都の深草から歩兵 38 連隊が移駐した。奈良連隊跡記念碑によると、駐屯した将兵の数は延べ７万人。シベリアや中国大陸、東南アジア、太平洋地域に出兵したという。戦後は米軍のキャンプ地になったが、1958 年１０月に奈良教育大学が移転した。米、麦などを保管した糧秣（りょうまつ）庫が教育資料館として使われ、弾薬庫跡なども残っている。

奈良学芸大学校舎

「昭和 34 年頃　米軍キャンプのおもかげを遺す旧校舎」

陸軍用地境界石

弾薬庫鬼瓦

満州事変後の 34 年（昭和 9）に「北満」に進駐。37 年（昭和 12）盧溝橋事件後の 8 月助川部隊中国 00 に進駐、11 月以降南京攻撃に参加。「揚子江岸で約四万を掃蕩、流れを血に染める」など南京大虐殺事件に関与したとの記録がある。1944 年（昭和 19）7 月にはグアム島にて玉砕。その後朝鮮に移駐し、南方に転進、シャン高原（ミャンマー）で終戦を迎えた。ビルマ方面軍は凄惨な戦いとなったインパール作戦にも参加した。

奈良聯隊は中国戦線に引き続いて、グアム島の玉砕、ビルマ作戦など、太平洋戦争のなかでも悲劇といわれる戦闘に従事したのである。

糧秣庫

聯隊の桜

また、奈良教育大学の北側、住所では奈良市高畑町 552 に奈良聯隊区司令部跡がある。現在は奈良労働基準監督署、奈良地方法務局、自衛隊奈良地方連絡部等が位置している。戦前はここに「聯隊区司令部」があり奈良県内出身者の徴兵検査が行われ、召集令状（赤紙）を発行する心臓部となっていた。

奈良聯隊跡記念碑

同所には奈良聯隊跡記念碑が建立されており、その裏側に

「この兵營に駐屯した將兵の數は延七萬に及び　シベリヤ出兵　満州事變　支那事變に引続き　大東亞戦争に参加し　遠くシベリヤより支那大陸、東南アジア及び太平洋諸地域に亘り赫々たる戦果を擧げた　又当時の兵営は尽忠報国の至誠にもゆる若人の道場であり　大和民族伝統の日本精神　即ち生を捨て義をとり　名節を尊び　進んで国難に赴き従容として死につく大和魂の錬磨と武技の鍛錬に精進した誠に意義深きところであった　茲に有志相圖り　由緒ある奈良聯隊跡を偲び先輩戦友の遺勲を永く後世に伝える爲記念碑を建立する（抜粋）」

と記されている。

日中全面戦争の開始以後太平洋戦争の終わりまでに、奈良県出身の戦死者は約 26,000 人といわれている。中国戦線での死者が最も多く、昭和 13、14、19、20 年に多かったという。

記念碑の裏面

第８章　五條の空襲　生蓮寺を訪ねて

―　ゼミ生訪問記　―

生蓮寺の所在地：〒 637-0071 奈良県五條市二見７丁目４－７

1945 年８月８日、奈良県の五條市を空襲が襲った。８月６日に広島、８月９日に長崎に原爆が投下されたことを考えると、最後の総攻撃の一部であったと推測できる。

奈良は歴史的な建造物が多く存在するため、空襲はなかったと考えている人も多くいる。しかし、実際に空襲があった記録が残されているのだ。さらに、奈良県に空襲があった日は大阪への空襲が行われた日と被っていることが多い。これは準備万端で空襲を行ったわけではなく単に通り道だから、という理由であった可能性も否定できない。

今回お邪魔させていただいた寄足山 生蓮寺は、五條市にある高野山真言宗の寺院で、古くから安産、雨乞いなどの祈祷請願所である。山号と呼ばれる寄足山は「よらせざん」と読み、高野山へ向かう空海が旅の途中にここへ立ち寄っていたことが由来となっているそうだ。また、寺のモチーフでもある蓮は仏教のシンボルであり、仏教において重要な役割を持っている植物である。こちらの和尚である高畑公紀さんにお話を聞かせていただいた。

まず、ご先祖様から伝え聞いた戦争に関するお話で、とにかく当時は飢えに苦しんでいたそうだ。正直現代の日本で暮らしている私たちでは想像し、苦しそうなことは分かるがそれ止まりである。本当の飢えを味わったことがないからだ。

高畑和尚は命の尊さや本当の飢餓を知るために単身でアフリカへ出向いたそうだ。そして平和であるこの世の中が決して当たり前ではないという事を伝えるために平和の鐘を鳴らし創めた。この平和の鐘は全部で 10 回鳴らすそうだ。この回数の意味は、東西南北で 8 方向、それに上下を加えたもので、全世界を表現している。この鐘は日本だけではなく、全世界へ向けてのメッセージなのだ。

和尚のように実際に考えたことを行動に移し、世間に問いかけることこそ、後の世界で悲惨な戦争を起こさないことに繋がる。私たち一人一人が、全世界の人々が、誰も戦争を望まなければ、将来のある若者の命や可能性を閉ざしてしまうことはないのだ。

実際にこの帝塚山学園からも学童疎開で疎開したが、戦争に巻き込まれ命を落としてしまった生徒もいたと記録に残っていた。

今回の調査で実際に戦争に対して危機感を持ち行動に移すことの重要さを改めて学ぶことができた。戦跡以外でも別の方向から警鐘を鳴らしている人がいることを、普通に生活しているだけでは気づくことができなかったように思う。

戦争の被害を乗り越え今がある、しかし戦争の被害があったことは忘れてはならない。現在、戦争経験者が少なくなってきており、生の声を若い世代に伝えていくことが難しくなりつつある。しかし私たちがその声を拾い、伝えていくことができれば将来は変わってくるかもしれない。

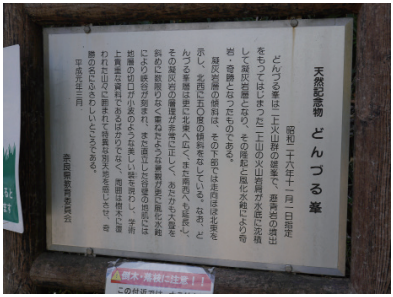
それを信じて一歩踏み出してみれば、また新しい発見ができるように思えた活動だった。

〔You Tube〕五條空襲から７３年　平和の鐘

第９章　香芝市の屯鶴峯地下壕

所在地：〒 639-0252 奈良県香芝市穴虫

香芝市穴虫にある屯鶴峯（どんづるぼう）地下壕は、太平洋戦争末期、旧日本軍により造られた西日本最大規模のあみだくじのように広がった地下壕である。山上に生い茂った木々の間から独特の白い岩肌がのぞく様子が、鶴がたむろしているように見え、屯鶴峯と呼ばれるようになったという。一帯の山々の白い岩肌から「鶴が舞い降りたような峰」という言い伝えもある。



本土決戦を指揮する拠点のひとつとして、陸軍航空総軍によって二上山のふもと、1945 年 6 月ごろから終戦までの約 2 カ月間で掘られた。大正飛行場（現在の八尾空港）の特攻隊に指令を出す場所として準備されたという。中は、高さ約 3 メートル、幅約 3.5 メートルの通路が迷路状に広がり、総延長約 2 キロ。当時の姿をとどめる地下壕としては西日本最大といわれ、1945 年 6 月ごろから、約 200 人によって掘られた山を東西に貫く 5 本のトンネルが通る。壁面にはダイナマイトを埋める穴やつるはしで削った跡が残る。

一度、11 月末に訪問したが、想像以上に足場が悪く、怪我をする可能性があったため、後日、出直すことにした。たびたび新聞に登場する「屯鶴峯地下壕を考える会」事務局長である田中正志さんを西田敦さんから紹介して頂いたこともあり、2 月 27 日に再訪が実現。途中、ゲリラ豪雨に見舞われたため、足場が悪くなったものの、田中氏の車に揺られながらミカン畑を突き進むと防空壕の入り口へとつながる地点に到着した。

天井に打ち込まれた測量用の釘

つるはしの跡

防空壕入り口までの山道は「道なき道」ではないが、夏場はスズメバチやマムシが出たりすることもあるという。また、防空壕の中では数は多くないものの、蝙蝠が冬眠している姿もあった。

冬眠中の蝙蝠

朝日新聞の記事を検索してみると、屯鶴峯に関する記事をいくつか発見できる（次頁）。田中さんによる強制連行の史実をつかむための聞き取り調査によれば、地元のお年寄り百人以上から話を聞いたものの、具体的な話はなかなか出てこない。ようやく、当時の日本兵が寝泊まりしていた家を探し出し、岐阜県に住む元日本兵に会えたという。

・元日本兵は、地下壕を掘ったのは日本兵約 200 人のほか朝鮮人約 100 人。

・みな徴兵された兵隊で 21、22 歳くらい。

・二上小学校に寝泊まりし、昼夜の二交代制で働いた。

・終戦の年の夏前から 2、3 カ月、東のトンネルを掘ったが、西トンネルは知らない

などと証言したという。（「どんづるぼう　田中正志さん（奈良半生記：7）」朝日新聞（1995 年 1 月 12 日）より）

1995 年には、8145 人の署名を添えて、瀬田道弘・香芝市長（当時）に地下壕の保存に取り組むことを求めた請願書が提出されたこともあった。地下壕は民間の土地にあり、保存には地権者の理解が必要になるが、市長は、どんづるぼう一帯を総合公園化する構想を抱き、その一環として地下壕を組み入れては、と述べたという。

現在では、田中正志さんが事務局長を務める「第一級の戦争遺跡である屯鶴峯地下壕の史実を多くの人々が学び、交流する場を提供するとともに、平和の尊さを伝え、人づくりの推進を図り、地域社会の活性化に寄与すること」を目的とする特定非営利活動法人「屯鶴峯地下壕を考える会」が活動を行っている。

かつては全国から見学希望が相次いだ奈良県内の戦争遺跡の名所でもあるが、現在は年間に 2、30 件の見学希望があるという。連絡がある度に屯鶴峯地下壕を案内するという田中さん。かつて壕を見学した小学生の感想としては「もっと戦争が長かったら、私もおらんかったんやなあ」「この地下壕は、奈良の原爆ドームだ」という声があったというが、「とにかく現場を見てほしい」という現場を大切にする田中さんのひとことが印象的であった。

＜朝日新聞記事データベースで検索した「屯鶴峯」関連記事＞

「（戦後７０年）通路縦横、広さに驚き　香芝の屯鶴峯地下壕、見学会ルポ」
2015 年 08 月 19 日（朝刊）奈良１・１地方

「平和へ、地下壕伝える　香芝・屯鶴峯、７２人見学」
2010 年 09 月 06 日（朝刊）奈良１・１地方

「（実況見聞　あれこれリポート）戦争跡地を歩いてみた　駅高架下なお残る弾痕」
2010 年 08 月 15 日（朝刊）奈良１・１地方

「戦争末期、悲惨さ生々しく　地下壕見学会に６０人参加　香芝」
2008 年 08 月 18 日（朝刊）奈良全県・１地方

「（実況見聞　奈良あれこれリポート）香芝の戦争関連遺跡『屯鶴峯地下壕』」
2005 年 06 月 19 日（朝刊）奈良全県・２地方

「戦争遺跡、保存に期待　屯鶴峯地下壕など（ニュースＥＹＥ）」
1998 年 12 月 08 日（朝刊）

「強制連行・労働者らの徴用実態　３７企業３７３人判明」
1997 年 04 月 26 日（朝刊）奈良

「地下壕見学会（平和を担う　５１年目の夏：上）」
1996 年 08 月 14 日（朝刊）奈良

「戦争を風化させるな！　地下壕を市民が見学　香芝」
1996 年 08 月 05 日（朝刊）奈良

「どんづるぼう（負の遺産　戦後５０年に寄せて：７）」
1995 年 08 月 23 日（朝刊）奈良

「戦争のない世界訴え『平和行進』県内入り　６日間、戦跡めぐる」
1995 年 06 月 26 日（朝刊）奈良

「屯鶴峯地下壕の保存求め香芝市に請願書　８１４５人の署名添え」
1995 年 05 月 30 日（朝刊）奈良

「戦争史料『屯鶴峯地下壕』の保存要望　香芝市長に市民グループ」
1995 年 05 月 28 日（朝刊）奈良

「どんづるぼう　田中正志さん（奈良半生記：７）」
1995 年 01 月 12 日（朝刊）奈良

「旧日本軍の地下壕見学会　２０日に、香芝市屯鶴峯地区で」
1994 年 11 月 09 日（朝刊）奈良

「風化せぬ闇、見学者続々　香芝の旧日本軍の掘ったトンネル群」
1994 年 08 月 04 日（朝刊）奈良

「強制労働の現場『どんづるぼう』見学　香芝で全国交流集会開催」
1993 年 08 月 01 日（朝刊）奈良

「豪華、謎の〝山の家〟主は遂に來なかった　奇勝屯鶴峯」
1945 年 11 月 13 日（朝刊）大阪

NPO 法人　屯鶴峯地下壕を考える会

第 10 章　RR センター跡

―米軍の娯楽慰安施設跡―

所在地：〒 630-8013 奈良県奈良市三条大路 4 丁目 1 － 1

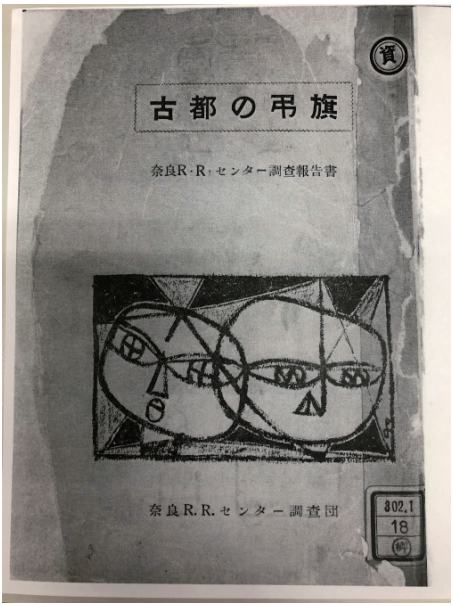
安全保障条約ののち日米行政協定が締結され、同協定に基づいて 1952 年（昭和 27 年）5 月に RR センター（Rest and Recuperation Center という表記もあれば、Rest and Recreation Center となっている資料もある）が大阪市内から奈良市尼辻町や横領町（元三条大路 4 丁目、積水工場跡地）に移転してきた。同センターは、朝鮮戦争からの帰休米兵を対象にした娯楽慰安施設で、当時奈良のほか、横浜・小倉の計 3 か所に設置されていたという。また、女性に対する米兵の暴行防止に神経がつかわれ、こうした施設の設置が急がれたという。戦場から帰還した兵士たちは、5 日間の自由時間を与えられ、当時の金額で 1 人平均 20 万円前後の金を落とし、再び戦場に戻っていった。RR センターに落ちる金額の総額は 1 か月に 1 億円ともいわれた。計算してみると、1952（昭和 27）年当時の 20 万円は、2017（平成 29）年の 100 万 6083 円に相当する額だという。

当時の貴重な写真「R.R センター周辺」は、説田晃大（監修）『写真アルバム　奈良市の昭和』（樹林舎、2015 年）の 54 頁に掲載されている。著作権の関係で掲載することはできないので同書を参照して頂きたいが、そ

のキャプションには「昭和 27 年 5 月、朝鮮戦争帰休兵のための娯楽慰安施設『R.R センター（Rest and Recuperation Center）』が、大阪市内から横領町（元三条大路 4 丁目、積水工場跡地）に移転してきた。近辺にはカフェ・バー、ギフトショップ、キャバレーなどが建ち並び、著しく風紀が乱れた。教育環境への悪影響もあり、婦人会、教職員、学生などが『センター廃止』の声を上げ、昭和 28 年 8 月、神戸へ移転することが決定、奈良から漸次米軍が引き上げていった。」とある。また、藤井辰三編『ふるさとの想い出　写真集　明治大正昭和　奈良』33 頁にも「尼辻 RR センター」として写真が掲載されている。

センター廃止の声を挙げたのは、1952（昭和 27）年 8 月（9 月と記述する資料もある）に結成された RR センター廃止期成同盟である。同盟にはユネスコ協会をはじめ奈良県地方労働組合総評議会、各種婦人団体、奈良市石野会などが参加した。奈良ユネスコ連盟の奈良学芸大や奈良女子大の学生たちは、奈良 RR センター調査団を組織し、『古都の弔旗』と出した報告書をまとめ上げた。同書は現在でも奈良県図書情報館において禁帯出ではあるが、閲覧が可能となっている。1953 年（昭和 28 年）9 月には完全に閉鎖され、神戸に移転したが、8 月 24 日からは米海兵隊 4000 人が奈良市内に駐留を始めたため、問題がすべて解決されたわけではなかった。

外国軍隊の基地があることで地域が変貌を遂げていく様を描いた映画『狂宴』（監督・関川秀雄）は 1953 年（昭和 28 年 12 月）から奈良でロケが始まり、翌年公開された。この映画は、平城京趾に突然「西部の街」が出現したことによって「米兵ブーム」に翻弄される村のひとびとの様子が描かれている。なお、『狂宴』は DVD 化されておらず、現在では鑑賞することは容易ではないものと思われる。関連する資料としてならの女性生活史編さん委員会 (編集)『花ひらく―ならの女性生活史』(奈良県、1995 年) や茶園敏美「映画『狂宴』にみるおんなたちの声―奈良 RR センター周辺の場合」『待兼山論叢　日本学篇』第 33 号（1999 年）がある。



現在は更地になっている工場跡地は今後、どうなるのか。

調べてみると、2018 年 8 月 20 日に奈良県庁において、平城宮跡歴史公園南側に位置する積水工業（株）跡地活用方策を検討するため、積水化学工業（株）・奈良県・奈良市が包括連携協定が締結された、というニュースを発見した。

産経新聞「平城宮跡南側どうなる？　市役所移転ご破算も都市公園化は着々」（2019 年 8 月 28 日）

第 11 章　法蓮佐保川町周辺と法華寺町

―奈良で最初に空襲があった場所―

1945 年 6 月 1 日に、奈良県で初の米軍による空襲があった。正午前に第 2 次大阪空襲からマリアナへの帰途、B29 1 機が佐保国民学校など数か所に焼夷弾を投下、平西米店（現永井商店南の地蔵安置所）、奥本宅（現乾モータース裏吉岡宅）の 2 戸が全焼、との記録がある。周辺での聞き込みやインターネット等では永井商店や乾モータースの存在を確認できなかったが、畠山製菓において場所を尋ねたところ、よく知られているお地蔵さんの場所へと行くことができた。実際の場所は、社福) 奈良愛の園福祉会 愛の園保育園を 80 メートルほど南下した三叉路に位置している。平西宅では初等科 1 年生の少女が命を落としている。佐保川からのバケツリレーで消火し、その他の場所は大事には至らなかったという。

法蓮佐保川町周辺が空襲された同じ時刻にはそう遠くない法華寺町も空襲された。どちらが先に空襲されたのかは不明である。ちょうど見光寺の裏に焼夷弾が投下され、 1 軒が全焼し、南側の 1 軒の軒下が焼けた。

『奈良県の百年』222 頁には「奈良県下の空襲年表（昭和 20 年）」が掲載されており、日時やおおよその時刻、場所、米軍機の種類、爆弾の種類、死傷者の数、損害の大きさなどが掲載されてある。

法蓮佐保川町のお地蔵様

手作りにこだわる畠山製菓

法華寺町の見光寺

法華寺町の見光寺の西側。現在は民家となっている

第 12 章　ROKKAN　ROOM

―民家の防空壕を改装したカフェ―

明治から昭和初期に花街として栄えた奈良市中心部の元林院に、置き屋（芸妓を抱えて料亭や茶屋にあっせんをする店）だった築約 140 年の建物を改装したカフェ「ROKKAN ROOM」がある。その店の入り口を入ってカウンター席の奥に進むと、地下に降りる 7 段のコンクリート製の階段があり、そこを降りていくと防空壕であった 10 畳ほどのカフェスペースがある。4 人席のテーブルが 4 つ並び、定員は 16 名といったところ。腰をかがめないと中へ進むことができない。地面もコンクリートであったが、オーナーの大八木もえさんは「畳を敷いただけ」という。木造民家の地下に作られたコンクリート製の防空壕の中に居ながら喫茶を楽しむという不思議な空間である。

ROKKAN　ROOM のみならず、奈良市内の民家には戦局悪化に伴って防空壕の増築が進んでいったという記録がある。『奈良市史』によると 1944 年 3 月に「奈良市内では各戸に少なくとも一個の防空壕待避壕を構築する」「奈良市では各町内会長、警防団長を集めて各所に模範待避壕をつくる」「模範待避壕を見倣って今月中に各戸一個以上五人乃至十人の家族が楽に待避できる壕を構築すること」が決定された。

住所　　奈良市元林院町 8
電話番号　　050-1112-7867
営業時間　　11:00 ～ 18:00（金土～ 22:00）
定休日　日・月曜日
駐車場　無

黒蜜杏仁豆腐とはちみつチーズケーキ

特集：西田敦氏による特別講演「奈良の空襲」レポート

西田敦さんは奈良県内における戦跡調査の第一人者と言ってよい。岐阜県に生まれ、奈良に魅せられて移住し、趣味のカメラを携えて県内の写真を撮影するうちに戦争遺跡に関心を持つようになった、という。その成果は西田敦『大和から もうひとつ つたえたいこと。 ― 奈良･戦災の記憶 ―』（やまとびと編集部、2008 年）という写真集として出版され、朝日新聞のデータベース「聞蔵Ⅱ」で検索すると、そのお名前を散見することが可能である 。

〔西田敦さんが掲載された新聞記事〕

・「平和の大切さ伝えたい　桜井の西田さん、県内の戦争遺跡たどる写真展　／奈良県」（2005 年 10 月 5 日朝刊）
・「忘れないで、古都の戦禍　奈良で写真展　／奈良県」（2008 年 7 月 27 日朝刊）
・「（戦後７０年）「戦争遺跡」、フィルムに　桜井の西田敦さん　／奈良県」（2015 年 8 月 26 日朝刊）
・「桜井・西田さん撮影の県内「戦争遺跡」写真５７点　奈良で１５日から展示　／奈良県」（2015 年 12 月 13 日朝刊）

今回の特別講演は、資料検索を行う中で西田敦さんの存在とその活動を発見し、戦争遺跡に関する人生の先輩の話を是非ともお聞かせ願いたいということでお願いしたところ、ご快諾頂いたという経緯がある。

1）奈良と空襲

講義の中では、パワーポイントのスライドと配付資料をもとにご自身の紹介や戦跡調査を開始したきっかけ、そして講演テーマである「奈良と空襲」についてお話し頂いた。

西田さんによれば、まず、戦時中の奈良のイメージとして第一に「貴重な文化財を守るために空襲は控えられた」という点と、第二に「空襲は小規模で、大阪の空襲の帰りについでに落としたものだ」という点があると指摘する。日本の軍部は当時、奈良について「宮内省関係地方トシテ防空上第一位ニ属スル安全地帯ナリ」と評価し、奈良の空襲が小規模かつ散発的だった最大の理由は、攻撃すべき軍事目標がなかったからである 。

安全地帯ゆえ、奈良は様々な形で人やモノを受け入れることとなった。その代表的な事象として国宝疎開や仏像疎開がある。開戦前の 1941 (昭16) 8 月から 11 月において東京帝室博物館 (東京国立博物館) の最優秀館蔵品約 300 点が奈良帝室博物館 (奈良国立博物館) へ疎開した。奈良帝室博物館に総面積 50 坪の木造防空地下壕を造る計画もあったし、正倉院に鉄筋コンクリート製半地下室を建造する計画などもあった（戦争による資材不足で実施できず)。

法隆寺の昭和大修理は昭和９年から始まった。昭和１５年から一流画家を動員して金堂壁画の模写が始まったものの、仏像修理の技術者も出征し、まさに民間の文化財は受難の季節を迎えた。反面、天皇家所有の重要美術品（帝室御物）には特別の処置がなされた。東大寺の大仏殿には迷彩が施され、法隆寺では五重塔が解体されて疎開することになった。

その他、学童疎開として 1944 年 (昭 19)6 月 30 日に学童疎開促進要綱が作成され、大阪 東成区、生野区、天王寺区から２９校約９千人の疎開児童が奈良県内の寺や旅館に宿泊した。縁故疎開の児童・生徒は約４万人といわれる。

「疎開」は何も人やモノの移動を伴うものばかりではない。「建物疎開」とは、空襲による火災の延焼を防ぐために建物を取り壊して空間をつくる作業のことであるが、現代を生きる大学生の世代にとっては、「建物疎開」と聞いても何のことか理解できない。西田氏の話によれば、奈良市、大和高田市、大和郡山市でも建物疎開が行われたという 。

「建物疎開　突然の立ち退き、憤り　戦時中、延焼防ぐため　奈良市中心部３６戸に命令　／奈良」毎日新聞 2019 年 8 月 16 日　地方版によれば、近くの警察署や電話局を事前に守るため、奈良市でも１９４５年７月１５日、市中心部の下三条町などの３６戸に取り壊しが命じられた。という。また、「県警察史によると、県内では４５年７月１５日に奈良市の約５０００平方メートル、郡山町（現大和郡山市）の約６４００平方メートル、高田町（現大和高田市）の約１万４０００平方メートルに建物疎開の命令が下った。続いて７月末にも疎開命令が出され、郡山町では家屋約５０戸、住民２００人あまりを立ち退きさせる計画が立てられた。」との記事の内容がある。

ところで、「奈良と空襲」というテーマに関しては、NHK スペシャル取材班『NHK スペシャル 戦争の真実シリーズ 1 本土空襲 全記録 (NHK スペシャル 戦争の真実シリーズ 1) 』（KADOKAWA、2018 年) の 102-106 頁には、「空襲は大都市から中小 180 都市へ拡大」「鉄道への直接攻撃、重要文化財のある奈良まで空襲へ」という見出しのもと、1945 年 7 月 24 日に王寺駅で機銃掃射を受けた鈴木知英子さんの証言が記録されている。この証言と鈴木さんご自身による戦争を後世に語り継ぐ活動は 2015 年 8 月 12 日のＮＨＫ「ニュースほっと関西」の中で「かんさい戦後 70 年の夏」シリーズとして放映された。奈良は大規模な空襲は受けなかったが、米軍

機による機銃掃射の被害が各地にあった。しかし記録が残っていないため、被害の実態は詳しくわかっていない。そうした中、米軍機による奈良県での機銃掃射の映像が新たにアメリカの国立公文書館から見つかった、という内容である。第二次世界大戦時、米国は戦闘機の翼に機銃掃射をするたびに連動するガンカメラを搭載していて、カラーで地上の壊滅ぶりを撮影していた。すなわち、映像は「攻撃する側」の実写映像であり、映像の中に「攻撃された側」の鈴木さんはじめ奈良県民の姿が写っているのである。国際法上違法であると言うべき民間人に対する攻撃（軍事目標主義違反）の証拠を残す当時の映像が残されている点は驚くべきことである。映像を紹介する当時のニュース映像は現在でも閲覧可能である。

〔dailymotion〕2015.8.12　ＮＨＫ　ニュースほっと関西
シリーズ「かんさい戦後 70 年の夏」機銃掃射の恐怖を後生に語り継ぐ

なお、中村隆英・宮崎正康（編）『史料・太平洋戦争被害調査報告』（東京大学出版会、1995 年）によれば、奈良県における銃後人口被害（日本国内において生じた、空襲艦砲射撃その他による銃後一般国民の直接の損耗をいい、身体生命に異常のない、いわゆる衣食住罹災者はこれに含まれない）に関しては、総計 190 名、死亡 68 名、重症 90 名、軽傷 32 名、行方不明 0 名という記録がある。昭和 19 年人口総数は、606,789 名。数字は 1948（昭和 23）年 5 月現在の調査によるものである。

２）ウォーナー恩人説

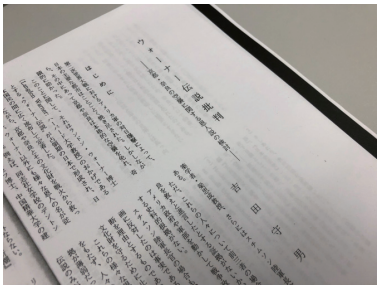
西田氏の講演において紹介されたひとつのテーマとしてウォーナー恩人説がある。歴史家にとっては周知の事実かもしれないが、「奈良と空襲」をテーマとしている以上、避けては通れない。

アメリカ人の美術史家ラングドン・ウォーナー (1881 － 1955 年) は、太平洋戦争中、日本の文化財を空襲の対象から除外するよう進言し、日本の国宝、個人所有の文化財 150 以上をリストアップした人物とされ、そのリストは「ウォーナーリスト」と呼ばれている。

日本三文殊の一つとして知られる桜井市阿部の安倍文殊院に「ウォーナー博士報恩供養塔」が建立され、法隆寺や国鉄（現ＪＲ）鎌倉駅前（神奈川県鎌倉市）など全国 6 か所に顕彰碑や記念碑が建てられている。しかし、1993 年に「古都の恩人伝説」を否定する論文が発表され、奈良は規模が小さく空爆リストの下位にあっただけで、奈良と同様の古都・京都が空爆を免れたのは原爆投下が予定されていたためであるとして、「占領政策上の理由でＧＨＱが『伝説』を作り上げた」と結論づけられた（吉田守男「ウォーナー伝説批判―京都・奈良の空襲に関する恩人説の検討」『日本史研究』第 383 号（1994 年 7 月）、30-58 頁。）

『奈良県の百年』には、「米軍が奈良を空襲目標からはずしたとはいえない事実」との記述がある。また、当時ハーバード大学付属フォッグ美術館東洋部長であったウォーナー博士によって作成された『陸軍サービス部隊便覧、民間事情ハンドブック、日本、文化施設』によって「奈良の爆撃が回避されたという積極的根拠はみあたらない。ウォーナー博士自身の言明どおり、かれは『リストを作っただけ』というのが真相であろう。」と記されてある。

当時、奈良県内の所在していた軍事施設としては、第三十八聯隊、奈良海軍航空隊、大和海軍航空隊（柳本飛行場）、大阪兵器廠北宇智村燃料倉庫ぐらいであった。



講演を聴いたゼミ生の感想

私は奈良についての空襲の話を聞いて私が考えていた空襲とは全然違いました。私が考えていた空襲は危ない物ではなく家に隠れておけば怪我もせずに済む、負傷者も10人くらいだと思っていました。ですが実際に空襲があった写真や話を聞いてみると家に突き刺さっているミサイル、親子と一緒に生きるために川の中に飛び込み親と別れ離れになった子供辛い話だと思いました。私は空襲を体験した事ないので話しを聞いてそんなんがあったんや苦労してはるなとしか思うことしかできないのですが実際戦争を経験した人生の大先輩からすると親を亡くして小さい頃から1人で頑張らなければいけない人もいただろうし、友達や家族を亡くして辛いけど悲しんでいるだけでは何も変わらないから今を変えようと思って努力した人もいると思います。口では簡単に言えますが空襲を経験した人の辛さはわかろうと思っても分からないと思いました。(T・K)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回、奈良県で起こった空襲について話を聞き、自分自身も知らなかった事が多く、奈良県で起きた空襲は、想像以上に多かった事を知り、とても驚いた。

戦時中は、奈良県はたくさんの文化財が多くあったことから、あまり狙われることがないであろうと、疎開先に選ばれるほどの安全地帯とされていたが、それは違い、戦時中、毎日のように警戒警報や空襲に警報が鳴り安全地帯とは程遠かったと言うことがわかった。奈良県には、榛原駅の高架下話で聞いた家に弾痕の跡など戦争があったとわかるものがとてもあることがよくわかった。戦争中は、今では想像できないことが実際に起こっていたと考えると、今後、自分たちのように戦争を知らない人達も戦争の危険性やもう二度と同じことが起きないように伝えていかなければならないと思う。(O・K)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

自分の中でも奈良はまったく戦争がないって言うイメージだったのですが、西田さんの話を聞いて、ゼミでやったこと以上に奈良にも戦争があってものすごく大変だったんだろうなと思いました。奈良は爆撃機の飛行コースで目的地まで行くまでに爆弾が落とされ、とても悲惨であった。ついでに落としていった感じが自分の中でしました。その影響で学童疎開や仏像疎開など子供はこれからの人生なのにそこで死ぬのも本当に可哀想だから、避難したのかなと思いました。奈良県には仏像疎開など、大事なものが眠っているのが多いので、壊されたら大変だし仏像を移動させるのも大変だったのかな、とか、空襲が終わってもまたそのところに戻すのも凄く大変だろうと思いました。自分が

調べた近鉄榛原駅の事ですが、自分が調べたのは一部であって、もっと調べるべきであったと後悔しました。（T・H）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

戦争を体験した人の話を聞いたり、現地に実際に出向き、戦争の傷痕を見に行ったり、滅多に聞けない貴重な話を聞けてすごくいい経験になりました。最近では戦争の話を聞くことが少なくなってきているので、このように話継がれて行くのは本当に大事なことだと思いました。私たちが、専門演習で戦跡調査をしている柳本飛行場や、榛原駅東高架下の弾痕跡の話も聞けて、当時防空壕はどのように使われていたか など、これから自分達がどのように戦跡調査をしていけばいいのか考え直させられました。奈良にもすごくたくさんの戦争の跡が残されているのに、奈良の人たちは『奈良には戦争はなかった』と言う人がいるそうで、みんなにも知ってもらいたいと感じました。（T・Y）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

西田敦さんの話を聞いて。初めに西田さんご自身の話を聞かせていただきました。その時に自分から介護職につきたいと思う志がすごいと思いました。その頃から、人の役に立ちたいと思う考えも素晴らしいものでした。

空襲の跡地を仕事ではなく、戦争の恐ろしさをより深く丁寧に教えて頂きました。その時に聞いた話で、私の知らない場所が空襲の被害に遭われていました。奈良が帰り道に空襲をされていた話を聞いて、帰り道についでに襲うという非人道的な事を聞き、戦争は悲しい行為だと思いました。こういった過ちが今、忘れ去られようとしているなかで、西田さんは現地まで行き、聞き取りなどをして後世まで残そうとしいている。西田さんの講義を聞き、私も忘れずに心に置いておこうと思いました。（T・Y）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

戦争を経験していないながらも私たちに分かりやすく話してくださり、自分で調べること以上に生の意見が聞けたように感じました。自らの足で戦跡の地に踏み込んだからこそ分かる事実というものがあり、それを写真を踏まえて話してくださったことで身を乗り出すほど興味がわきました。そして私も実際に見に行こうと思いました。特に元々防空壕だった場をカフェに改装したお店がすごく見入ってしまい家に帰った後すぐに調べました。今流行りのインスタ映えしそうだなと思い、是非近々行こうと思います。冒頭で認知症の方のお話の内容を聞いたとき認知症の方が話す当時の状況が想像を絶する

ほどの内容で、この話は今からの世代に伝えていかなければならない。途切れさせてはいけないと強く感じました。(S・M)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私は奈良の空襲の演説を聞き、私が今まで学んできたものとは全く別物だと感じた。特に２つのことに驚いた。まず１つ目は奈良の軍人がアメリカへ攻撃するために戦闘機の基地を男性の子供から老人を強制的に働かせて造らせていた事などである。基地を造るためにそこの土地にあった墓を全て掘り起こしてどかさせたことを知った時はすごく残酷だなと思った。２つ目は、戦時中に食料不足に陥った時に野生の鹿を捕食していたことである。鹿はアメリカ軍人が銃で撃って殺害して遊んでいた事もあり、数が激減していたこともあり絶滅危機になっていた。その話を聞いた時すごく不快な気持ちになった。今回の演説を聞き、戦争について教科書だけを当てにするのではなく、実際に戦争を体験した人に話を聞くことも大切だと痛感した。(H・Y)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

奈良県は、被災地というイメージがない中で、話を聞いているうちに、被害のない地域などなかったのではと思うようになりました。戦争と聞くと、やはり広島や長崎、東京などを思い浮かべるので、奈良県でも被害があったということを、私たちより下の世代に伝えないといけないと思いました。戦争という過去を、私たちがどう伝えるかで、これからの未来が左右されるだろうと思います。そういったことから、やはり言葉だけでなく、形に残しておくのも大事なので、戦跡というのはこれからも国の保存物として、これからのためにおいといてほしいと思いました。(N・A)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回の講義で、奈良県各地の戦争被害を知り驚いた。以前に五條の空襲をテーマにして調べる機会があり、その時に私が調べきれなかった事も知ることができた。疎開先は決して安全ではなかった事を世間の人たちにももっと感じて欲しいと思った。また大阪の空襲の日と被っていることから、帰りや行きのついでにとの内容があったが、ついでに空襲をするという行為はとても許されるものではないと感じ、戦争の残酷さを風化させずに語り継いでいかなければならないと改めて考えることができた。(I・D)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

西田敦さんの講義を受けて、奈良県の空襲と被害について多くのことを知れました。

戦時中に、「防空上第一位ニ属スル安全地帯ナリ」だと奈良は安全地帯と言われて大阪からの学童疎開や有名な歌手や女優、小説家をはじめとする芸能人などの縁故疎開が多く行われました。

戦争の被害から逃れるそれらの疎開の中で驚いたのは、国宝疎開というものです。それは、東京帝室博物館から最優秀館蔵品約 300 点を奈良帝室博物館（奈良国立博物館）へと開戦前に疎開するものです。人だけでなく、歴史的価値があるものを被害が少ないと思われる地域への疎開をしていたことは知らなかったので、非常に驚きました。

このように奈良は、戦争が行われる前から建国の聖地だとか様々なことを言われて被害が少ないと思われていましたが実際のところ、奈良上空が爆撃機の飛行コースということもあり、連日の警戒警報や空襲警報がありました。1945 年には初めての空襲があり、安全なところは少ないと思いました。

最後には「日本国憲法第九条はすべての戦争犠牲者の遺言」という言葉を聞き、非常に胸が打たれました。（U・T）

西田敦さんとの記念撮影

※プライバシーに配慮し、ぼかし加工を入れてしてあります

＜参考文献＞　※出版年順

高原富保編『1 億人の昭和史　4　空襲・配線・引揚』（毎日新聞社、1975 年）
日本の空襲編集委員会編『日本の空襲〈6〉近畿』(三省堂、1980 年)
日本の空襲編集委員会編『日本の空襲〈10〉補巻』(三省堂、1981 年)
帝塚山学園創立四十周年記念誌編集委員会（編）『星晨　創立四十周年記念誌』（1981 年）
奈良県教職員組合・婦人部『奈良にも戦争があった』（戦争体験の記録編纂委員会、1983 年）
鈴木良編『奈良県の百年　県民百年史』（山川出版社、1985 年）
8・8 文集委員会編『五條の空襲 : 昭和二十年八月八日』（8・8 フェスティバル、1992 年）
吉田守男「ウォーナー伝説批判 -- 京都・奈良の空襲に関する恩人説の検討」『日本史研究』第 383 号（1994 年 7 月）
奈良市史編集審議会編『奈良市史　通史四』（奈良市、1995 年）
中村隆英・宮崎正康（編）『史料・太平洋戦争被害調査報告』（東京大学出版会、1995 年）
中村隆英・宮崎正康編『史料・太平洋戦争被害調査報告』（東京大学出版会、1995 年）
ならの女性生活史編さん委員会 (編集)『花ひらく―ならの女性生活史』（奈良県、1995 年）
茶園敏美「映画『狂宴』にみるおんなたちの声―奈良 RR センター周辺の場合」『待兼山論叢　日本学篇』第 33 号（1999 年）
空白の昭和史刊行委員会編『ドキュメント写真　空白の昭和史　第 4 巻　空爆による被害状況　関東・中京地区』（エムティ出版、1999 年）
木村博一『奈良のあゆみ　三訂増補』（奈良市、2002 年）
高野真幸『幻の天理「御座所」と柳本飛行場』（奈良県での朝鮮人強制連行等に関わる資料を発掘する会、2003 年)
奈良県退職教職員協議会編『わたしの戦争体験　第 4 集』（奈良県退職教職員協議会、2003 年）
平和のための大阪の戦争展実行委員会 (著)、日本機関紙協会大阪府本部 (著)『大阪・奈良 戦争遺跡歴史ガイドマップ〈2〉』（日本機関紙出版センター、2003 年）
平和のための大阪の戦争展実行委員会 (著)、日本機関紙協会大阪府本部 (著)『大阪奈良戦争遺跡歴史ガイドマップ〈3〉』（日本機関紙出版センター、2004 年）
大岡聡、成田龍一「空襲と地域」、倉沢 愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争〈6〉日常生活の中の総力戦』（岩波書店、2006 年）所収。
伊香俊哉「戦略爆撃から原爆へ　―拡大する『軍事目標主義』の虚妄」倉沢愛子ほか編『岩波講座　アジア・太平洋戦争 5　戦場の諸相』（岩波書店、2006 年）所収
西谷文和『報道されなかったイラク戦争』（せせらぎ出版、2007 年）
西田敦『大和から もうひとつ つたえたいこと。 ― 奈良・戦災の記憶 ―』（やまとびと編集部、2008 年）
生駒市教育委員会『ハンドブック　生駒の歴史と文化』（2008 年）
和田萃・安田次郎・幡鎌一弘・谷山正道・山上豊『奈良県の歴史　第 2 版』（山川出版社、2010 年）
工藤洋三『米軍の写真偵察と日本空襲　-　写真偵察機が記録した日本本土と空襲被害』（自費出版、2011 年）
奈良ホテル『百年のホテル』（2012 年）

帝塚山学園創立 70 周年記念誌編集委員会（編）『帝塚山学園七十年史』（2012 年）
宇陀市総務部秘書広報情報課『広報うだ』2014 年 8 月号
飯田則夫『大日本帝国の戦争遺跡』（ベストセラーズ、2015 年）
林博史、原田敬一、山本和重編『地域の中の軍隊 9　地域社会編　軍隊と地域社会を問う』（吉川弘文館、2015 年）
原田敬一編『地域の中の軍隊 4　近畿　古都・商都の軍隊』（吉川弘文館、2015 年）
説田晃大（監修）『写真アルバム　奈良市の昭和』（樹林舎、2015 年）
白川哲夫『戦没者慰霊と近代日本―殉難者と護国神社の成立史』（勉誠出版、2015 年）
奈良ホテル『奈良ホテル物語』（2016 年）
高野真幸『僕は少年ゲリラ兵だった : 陸軍中野学校が作った沖縄秘密部隊　NHK スペシャル取材班』（新潮社、2016 年）
消えゆく太平洋戦争の戦跡編集委員会 (編)『消えゆく太平洋戦争の戦跡』(山川出版社､2017 年)
林博史『沖縄からの本土爆撃 : 米軍出撃基地の誕生』（吉川弘文館、2018 年）
NHK スペシャル取材班『NHK スペシャル 戦争の真実シリーズ 1 本土空襲 全記録 (NHK スペシャル 戦争の真実シリーズ 1) 』（KADOKAWA、2018 年)
松本泉『日本大空爆 ―米軍戦略爆撃の全貌』（さくら舎、2019 年）
産経新聞「平城宮跡南側どうなる？　市役所移転ご破算も都市公園化は着々」2019 年 8 月 28 日
毎日新聞「零戦施設、飛行場跡…戦争遺跡「どうして壊したの？」 保護に自治体及び腰」2019 年 12 月 7 日
毎日新聞「消える戦争遺跡　全数調査 6 県のみ　全体像把握進まず　毎日新聞調査」2019 年 12 月 7 日

※資料収集に際しては、帝塚山大学同窓会からの財政的支援を受け、帝塚山大学図書館ならびに奈良県立図書情報館の協力を得て集めたものも多数あります。御尽力頂いた同窓会の OB・OG の皆様ならびに図書館職員の皆様に御礼申し上げます。

冊子名：『奈良県の戦争遺跡』（Web 版・非売品）
発行：帝塚山大学法学部　国際法・平和学ゼミ
（4 年生 4 名、3 年生 6 名）
指導教員：末吉　洋文（法学部教授）
お問い合わせ先：　e-mail：sueyoshi@tezukayama-u.ac.jp
2020 年 8 月改訂

© 帝塚山大学国際法・平和学ゼミ（指導教員：末吉洋文）